

実践報告

異文化理解の視点を取り入れた 「日本文化」授業デザイン

松下恵子（国際連携部門 特任助教）

要旨

本稿は、筆者が行った「日本文化」授業の実践報告である。学習者が日本文化に関する自身の考えを表現することが重要であるとの考えから、日本文化について多角的な視点から考えることのできる授業をデザインし実施した。活動記録による実践のふり返りや授業前後に実施したアンケートによって、学生の日本文化に対する捉え方の変化を分析することで、授業実践に効果があったのかどうかを検証する。

キーワード：日本文化、異文化理解、自己表現、相互理解、文化的気づき

1. はじめに

日本文化について何をどう教えるのかという問題は、日本語教師であれば誰もが一度は悩んだことがあるだろう。日本文化を扱う授業というものをイメージすると、「伝統文化体験」「映画・アニメ鑑賞」などが思い浮かぶのではないか。国際交流基金（2018）による世界の日本語学習者に関する調査では、学習目的は「マンガ・アニメ・J-POP・ファッション等への興味」「歴史・文学・芸術等への関心」などが上位であり、最近では「日本への観光旅行」も人気が高まっていると報告している。

日本文化体験学習にかかわる日本語教師への調査（森川 2020）によると、全員が体験学習に意義があると感じており、その大半が実践経験を持っていた。その目的は「日本の伝統文化を体験して知るとともに、日本語を使って日本人と話し、学習者がさらに日本語・日本文化への興味を持つようにすること」であり、学習者に期待するものとして、「日本語学習への動機づけ強化、日本特有の美意識や精神性を学ぶこと、自国文化との比較、日本語を使った他者とのコミュニケーションなどの効果促進」を挙げている。その一方で、「体験学習のみでは学習にならない」「専門性のない日本語教師が文化を教えられるのか」など、授業の価値や専門性を疑問視する声もあったと言及している。

筆者は、伝統文化体験や映画鑑賞といったレクリエーション活動は行いたい、それだけでは大学の教養科目として不十分なのではないかという気持ちがあった。常に悩まされるのは、「日本文化を理解する」とは具体的に何を指すのか、異文化理解の重要性は理解できるものの授業にどのように取り入れるのか、さらに学習者の「文化」に

対する理解度をどのように判断し評価するのがイメージできないことである。したがって、本稿では、文化に対する考え方を改めて概観し、これまで行われてきた日本文化に関する教育実践を確認する。そして、筆者の日本文化に関する捉え方を明確にしたうえで、2020年度に実施した「日本文化入門」における実践を検証し評価する。最後に課題点や今後の授業展開案について述べる。

2. 先行研究

「文化」に関する捉え方は幅広いが、文化には二つの意味が含まれるとするものが多い。Hall (1976) は、文化を海に浮かぶ氷山にたとえ、海面上に現れ見ることのできる「認識できる要素 (人間の行動)」と、海の下に隠れた「見えない要素 (感情や信念)」に分け、見ることのできる文化は全体の10%程度であるとした。Bennett (1998) も大文字の「Culture」と小文字の「culture」とに分け、前者を人々が作り出したもので客観的に鑑賞できるもの、後者を人々の行動や信念、価値観などの主観的要素の強いものであるとした。そして、ある集団において人々が互いに相互作用し、かかわりあう中で、2つの要素が学習され、共有されていくパターンが「文化」とであると定義した。

「日本文化」をどう捉えるかについては、1990年代ごろから日本語教育において何をどのように教えるのかという議論とともになされてきた。ネウストプニー (1995) は、言語教育とは、「コミュニケーション教育」や「社会・文化行動教育 (ジャパン・リテラシー¹⁾)」を行うことであるとし、言語能力には「言語能力」「社会言語能力」「社会文化能力」があり、日本文化や日本事情の授業において、これらの言語能力を育てることが重要だとした。また、細川 (2012) は、日本語教育において「物事や事柄を知識情報として学習することではなく、自分の考えていることを的確に表現すること」が重要であると主張した。そして、「文化」を集団としての「社会」の中にあるのではなく、人間一人一人の個人の中にある不可視知の総体「個の文化」と捉えた。「個の文化」は、個人の中にあり外側からの観察では明らかにすることはできず、相互コミュニケーションを通して認識できる。したがって、個人の中に備わっている「個の文化」をどのようにして引き出すか、発信させるかということが言語文化教育の課題であり、自らを取り囲むさまざまな事象としての対象を、どのように認識し、それを他者に向けてどのように記述していくかという意識が必要であるとした。

日本文化に関する授業実践については、環境問題」「法律」「日本の歌」などの身近な出来事から日本人や自己について考える取り組みを行ったもの (徳井 1997)、インドネシアの日本語学科の学生を対象に「文字」「季節行事」「マンガ」「カラオケ」「日本食」「茶道」「書道」などを体験させ、体験を通してその背景にあるものや自分達との関わりを理解させる取り組み (高崙・都 2016)、「文化への気づき」を育成することを目的に日本文化と自国文化を比較し、思考方法やコミュニケーションスタイルの違いについて分

析し発表するもの（村松 2017）、日米協定大学の日本語クラスをオンラインでつなぎ、学生が協働で学習する COIL 型授業を実施し、「結婚・ジェンダー」「教育」「ビジネス」「宗教」「食べ物」「ポップカルチャー」などのリサーチトピックから研究テーマを選び、オンラインでインタビューやディスカッションを行うといった活動（小玉 2018）、「大学と周辺地域を探索すること」をテーマに、大学出身の有名人の調査や地域の現代アートの作品紹介、地域住民へのインタビュー実施など、地域性を取り入れた取り組み（西谷 2019）などが行われている。

3. 教育実践の目的

筆者は日本文化を「見える文化」と「見えない文化」の2要素があると捉え、また、細川による「個の文化」の立場に立ち、個人の中に「文化」が存在するものとする。そして、異文化理解の視点とは、個人の中にある「文化」に気づき、他者に発信することであると考え。異文化理解を目指した日本文化の授業では、様々な活動や他者とのやり取りを通して、日本文化に対する考えについて学習者が自信を持って表現できることが重要である。したがって、教育実践の目的を以下の2点に設定する。

- ① 日本文化について多角的に考えられるような授業を計画し実施する。
- ② 授業を通して学生の日本文化に対する捉え方がどのように変化したのかを確認し、授業デザインの改善を図る。

4. 授業内容・授業方法

本稿で取り上げる授業は、筆者が2020年度に実施した「日本文化入門 A（前期）」および「日本文化入門 K（後期）」である。これらの科目は、和歌山大学の学部留学生を対象とした教養科目の「日本事情・日本文化科目（留学生対象）系」に属しており、他の科目には「日本事情」「日本文化とビジネス日本語」「日本語日本文化研究」がある。「日本文化入門」科目の実施期間、授業回数、学習者構成は以下のとおりである。

科目名	日本文化入門A	日本文化入門K
授業期間	2020年4月～8月	2020年10月～2021年1月
授業回数	14回（105分/回）/オンライン授業	14回（105分/回）/オンライン授業
学習者	クラス人数：15名 漢字圏9名 非漢字圏6名 日本語学習歴：3年以上 日本語レベル：中級～上級	クラス人数：12名 漢字圏4名 非漢字圏8名 日本語学習歴：3年以上 日本語レベル：中級～上級

4.1. 授業目標

授業の目的は、日本文化について伝統芸能、服装史、宗教や美術といった様々な角度から幅広く学び、自国文化との比較を通して日本文化を理解することにある。したがって到達目標は、「日本の抽象的な文化的話題について、自信を持って話し合いをすることができ、自分の考えを表現できること」とした。

そして、授業目標を達成するために、次のようなことをシラバスに明示した。①受動的に教師の話聞くのではなく、積極的に参加し発言や質問をすること、②授業で扱うテーマについて、インターネットや文献などのリソースを使って調べ自学自習を行うこと、③課題については、題材を自分で決めレポートとしてまとめたり、意見を述べたりすること、④最終プレゼンテーションで日本文化についての自分の考えを発表することである。

4.2. シラバスおよび活動内容

シラバスを計画する際には、自律学習能力である「学習者オートノミー²」を育むこと意識し、それぞれの活動内容にバリエーションを持たせたり、学生自身に授業の取り組み方を決めさせたりするなどした。

授業計画と具体的な内容を表1と表2にまとめた。日本文化の中で筆者が実施可能な5つ程度のテーマを設定し、1つのテーマを2~3回に分けて授業計画を立てた。各テーマの授業構成は、まず1回目に講義や活動を行い、2回目にグループ活動を実施、3回目にグループ発表を行った。課題については各テーマの1回目に課題内容を提示し、提出期限を次のテーマが始まるまでの4週間後に設定した。

さらに、日本文化について様々な角度から学ぶという目的から1つのテーマの中でいくつかの活動を組み合わせた。「講義」では、教師からの一方的な講義形式とならないように事前学習を取り入れたり、参考資料や文献を学生たちで探して紹介したりするなど、学生たちが講義に参加しているという意識を持たせるようにした。「グループ活動」では複数のリソースに触れ、グループで調べたことを発表する活動を基本とし、個別活動においてもまずはグループでアイデアを出し合ってから個別に活動するように指示した。「課題」についてはレポートだけでなく、音声ファイルや動画ファイル等のメディア形式の提出を課し、多方面から自分の考えを表現できるようにした。そして、「単位認定試験」では、総まとめとして3分間プレゼンテーションを実施し、授業の中で扱ったテーマから日本文化について調べたことを発表するという内容にした。

成績評価については、各テーマの課題提出(50%)および最終プレゼンテーション(50%)にて行うこととし、日本文化の知識を問うようなテスト評価ではないことを事前に説明した。

表1「日本文化入門A」シラバス

日本文化入門A (前期)		
回	テーマ	具体的な内容
1	オリエンテーション	授業説明/自己紹介
2-3	日本の美術 美術史/現代	【講義】日本美術史(古代~江戸) 【活動】現代アートについて 【課題1】美術鑑賞レポート
4-6	書道 書体、仮名	【講義】書道の歴史/書体、仮名 【グループ活動】くずし字解読(明治時代の国語教科書) 【課題2】自国の書道文化に関するレポート
7-8	日本の古典文学 古典文学史 百人一首	【講義】古典文学史 【グループ活動】百人一首を読む 【課題3】竹取物語/平家物語の朗読
9-10	四季の祭り 和歌山の祭り	【グループ活動】和歌山の四季の祭りを紹介する 【課題4】四季の祭り紹介(グループ発表)
11-13	茶道 歴史/作法	【講義】茶道/歴史、作法 【グループ活動】茶道の作法
14	プレゼンテーション	【発表】3分間プレゼンテーション

表2「日本文化入門K」シラバス

日本文化入門K (後期)		
回	テーマ	具体的な内容
1	オリエンテーション	授業説明/自己紹介/事前調査
2-4	日本の伝統芸能 歌舞伎/能	【講義】歌舞伎・能 【ミニ発表】自国の伝統芸能について 【課題1】歌舞伎に関するレポート
5-7	日本の服装史 縄文時代~現代	【講義】古代~現代の服装史 【グループ活動】特定の時代を選び、服装について調べる 【課題2】自国の民族衣装の特徴に関するレポート
8-10	日本の宗教 和歌山/キリスト教 イスラム教/神話	【グループ活動】和歌山県内の世界遺産について 【グループ活動】日本国内のキリスト教、イスラム教 【課題3】アイヌ神話、琉球神話の朗読
11-13	日本の美術 江戸時代/現代	【講義】日本美術史(古代~江戸) 【グループ活動】現代美術の鑑賞活動 【課題4】江戸時代の美術作品の鑑賞レポート
14	プレゼンテーション	プレゼンテーション評価活動 【事前課題】3分間のプレゼンテーションビデオ作成 【評価活動】自己評価・他者評価

4.3. シラバスの変更および遠隔授業の形態について

新型コロナウイルス感染症の拡大を防止するため、2020年度はすべて遠隔授業となり、シラバスも遠隔授業に対応する内容に変更した。主な変更点は、教室活動ができなため、伝統文化体験学習（書道、和菓子作り、茶道、着物着付、文化施設訪問等）の実施をすべて取りやめた。その代わりに、学習 WEB サイトや動画サイトなどのオンラインリソースを充実させ、文章表現や動画作成の技法を学ばせるといった自己表現に関する活動を新しく取り入れた。

遠隔授業の形態としては、「リアルタイム型（同期型）³」および「オンデマンド型（非同期型）⁴」を組み合わせで行った。講義やクラス活動は Zoom 会議ツールやブレイクアウトルーム機能を使い、講義資料や活動記録、課題などのリソースは Moodle や Microsoft Stream など管理し、授業に関する連絡や質問等の個別対応は Microsoft Teams を使用した。

5. 教育実践の評価方法

実践において多角的な視点から日本文化について考えることのできるような機会を提供できたかどうか検証する。具体的には、活動記録や学生の成果物から実践を振り返り、授業前と授業後に実施したアンケートによって学生の「日本文化」に関する捉え方の変化を分析することで、実践効果があったのかどうかを評価する。

6. 授業実践の内容

授業実践を「伝統文化」「文学・芸術」「抽象的内容」「プレゼンテーション」のテーマごとに分け、それぞれの取り組みについて報告する。

6.1. 「伝統文化」をテーマとした授業

これらのテーマについては、体験学習とは異なる視点から学ぶことができるように工夫した。様々な活動を通して何に興味を持ち面白いと思ったのか、調べて分かったこと、自国文化との比較などについて、学生に自分の考えを言語化させることを意識した。

①書道（「日本文化入門 A」で実施）

学習 WEB サイト「ひろがる もっといろんな日本語」を取り入れた事前学習を行った。授業の初めに事前学習で新しく学んだことを発表し合った後で、それぞれの書道経験について話してもらった。講義で書道の歴史や漢字の書体、仮名について学習したあと、グループ活動では「変体仮名」で書かれた明治時代の小学校国語教科書を解説

する活動を行った。また、変体仮名を使った日用品を紹介して確認クイズを行ったり、子どもの名前やカタカナ語に対して使われる漢字の当て字について話し合ったりした。

②茶道（「日本文化入門 A」で実施）

講義では茶道の歴史と作法を中心に動画サイトや学習 WEB サイト「ひろがる もっといろいろな日本語」を使って学習した。茶を立てる・茶を飲むという体験ではなく、茶事と茶会の違い、主人の準備や作法、客人の露地での過ごし方など全体の流れを学習した。グループ活動では、茶室への入り方や茶碗の持ち方について練習をしたが、WEBカメラを通しての体験活動はうまく行かなかったため、作法の動画鑑賞に変更した。

③服装史（「日本文化入門 K」で実施）

講義で縄文時代から現代までの服装史について紹介した後、興味のある時代の服装についてグループで調査し発表する活動を行った。学生自身でテーマを見つけ、学習計画を立てることを意識してもらうため、教師からは発表方法のみを指定し、その他についてはグループで相談して決めるように伝えた。グループ発表はすべて録音録画し、記録動画を Microsoft Stream を使って限定公開し、いつでも見られるようにした。

6.2. 「文学・芸術」をテーマとした授業

これらのテーマでは、多角的なアプローチで「作品鑑賞」ができるように工夫した。そして、作品を鑑賞して感じたことや自分なりの解釈について、発言するだけでなく、レポートや朗読、プレゼンテーションなどの形で表現させることを意識した。

①古典文学（「日本文化入門 A」で実施）

講義で文学の歴史を簡単に確認した後、「文学を味わうこと」を体験してもらうために、小学生向け学習 Web サイト「おはなしのくにクラシック」を使って「百人一首」を学習した。そして、好きな句を選んでもらい、同じものを選んだ人とグループになって、なぜその句を選んだのかを話し合ってから、「上の句」「下の句」に分かれて読み合った。課題は、レポートではなく、「平家物語」「源氏物語」の原文を同サイトで学び、どちらかを選んで気持ちを込めて朗読することをさせ、音声ファイルを提出させた。朗読劇さながらの感情が込められたものや、効果音や BGM を入れたものなど、学生それぞれの表現がされたものが多かった。

②日本美術（「日本文化入門 A」「日本文化入門 K」で実施）

講義で日本美術の歴史を簡単に確認した後、「作品をじっくり鑑賞すること」を体験してもらうために、Web サイト「Google Arts & Culture」を使って、東京国立博物館の所蔵作品の高解像度画像を拡大機能で鑑賞した。そして、縄文時代から江戸時代間に作られた作品の中から1つを選び、その作品を鑑賞してレポートを書く課題を課した。作品概要（作品名／作者／制作年月／種類）、鑑賞して気づいたこと、作品の魅力について2000字程度で書くように指定した。

③伝統芸能（「日本文化入門 K」で実施）

講義で能や歌舞伎の歴史や概要を簡単に確認した後、「道成寺」「勸進帳」の物語のあらすじを各自で調べて発表し、これらの物語を扱った能や歌舞伎の作品を鑑賞する際のポイントを決めてもらった。その後、実際にこれらの作品を鑑賞し、それぞれの特徴について気づいたことを話し合った。また、3回目に自国の伝統芸能を紹介するプレゼンテーション発表を行った。課題レポートは歌舞伎について、「化粧」「演技」「音」「衣装」「舞台」の5つのテーマから興味のあるものを1つ選んで書くように指定した。

6.3. 「抽象的なトピック」をテーマとした授業

抽象的な話題は、学生が身近に感じられるようにテーマについて地域性を取り入れ、グループ活動を中心に学生や教師とのコミュニケーションを通して個人にとっての文化の捉え方を考えさせ、また、他者とのやりとり（インターアクション）を通じて他者との関係性構築や相互理解を目指した異文化間能力を育むことを意識した。

①四季の祭り（「日本文化入門 A」で実施）

まず初めに、「春」「夏」「秋」「冬」の4グループに分かれて和歌山県の風習や祭りについて調査する活動を行った。その後、これらのグループは解散させ、四季のメンバーが混在する新たなグループを作り、そこで各季節で調べたことを報告し合い、学生自身の祭りの体験について話し合った。そして、和歌山の四季の祭りを1枚のパワーポイントにまとめてグループ発表を行った。同じ祭りを扱っていても、グループごとに観点の異なる発表内容となり、グループ内のインターアクションの違いがよく現れた活動となった。グループ発表は記録動画を Moodle に保存し、いつでも見られるようにした。

②日本の宗教（「日本文化入門 K」で実施）

事前学習として、和歌山県の世界遺産や重要文化財となっている宗教施設の名称を伝え、それぞれの宗教や宗派、地理について調べさせ、授業導入の際に確認を行った。そのうえで、学生が訪れたことのある施設や行ってみたい場所について話し合った。

講義では、仏教と神道の歴史を確認し、寺と神社の違いなどについて話し合ったり、神事や能について学生が知っていることを話したりした。グループ活動では、「仏教」「キリスト教」「イスラム教」のグループに分かれ、日本の中でのこれらの宗教についてトピックを決め調査する活動を行った。トピックの選定や調査の進め方については、学生たちで話し合って決めるように指示し、調べたことを各グループ15分以内で口頭発表するように伝えた。また、地域の風習や祭事との関係について学んでもらうために、課題としてアイヌや琉球の言葉で書かれた神話を朗読させ、その音声ファイルを提出させた。

6.4. 最終プレゼンテーション

単位認定試験では、授業を通して学んだ「日本文化」について、自分の考えを発表することを目的とした最終プレゼンテーションを実施した。授業で扱ったテーマの中から1つを選び、3分間のプレゼンテーションを行う。プレゼンテーション形式は「Three Minute Thesis (3MT®)⁵」を参考にし、①1枚のシンプルなスライドのみを作成すること、②スライドにはアニメーションや動画などを使わないこと、③演劇や歌などのパフォーマンスではなく、日本語によるスピーチのみを行うこと、というルールを設けた。

「日本文化入門 A (前期)」では、授業最終日に15名のプレゼンテーションを実施し、その様子を録画したが、質疑応答やふり返りの時間を取ることができず、学生同士のコミュニケーション活動ができなかった。そのため、「日本文化入門 K (後期)」は、事前課題としてプレゼンテーション動画をあらかじめ提出させ、授業最終日は評価活動を行った。評価活動は、学生それぞれが動画共有サイトのプレゼンテーション動画を見ながら「評価シート」を使って他者評価と自己評価を行うものである。評価の観点はルーブリック評価で、コメント欄にプレゼンテーション内容についての感想を詳しく書くように指示した。そして、学生の記入した他者評価シートは、教師の個別フィードバック時に一緒にまとめて送った。

最終プレゼンテーションを行うにあたり、授業初回からグループ発表や個別発表の際には同じ方法で発表させ、この形式に慣れるようにした。また、動画を事前準備させることで、学生はプレゼンテーションに向けてしっかり準備をして、納得のいくまで何度も撮り直しをするなど、完成度の高い内容の作品が提出された。また、評価活動を取り入れたことで、プレゼンテーションの内容について客観的に見ることができるようになった。

7. 学生の「日本文化」に対する捉え方

授業全体のふり返し活動は、学習者の文化的気づき／カルチュラル・アウェアネス (cultural awareness) ⁶⁾ にとって重要ではあるが、グループで10分程度話し合った内容を代表者がその場で全体に共有することで、本当に各個人のふり返しや日本文化への気づきにつながるのだろうか。このような疑問から授業前後にアンケート調査を行い、学生の「日本文化」に対する捉え方に変化があるのかを見ることにした。

「日本文化入門 K (後期)」の学生12名に対して、自由記述式によるアンケート調査を実施した。各テーマ(伝統芸能、服装史、宗教、美術)について、授業前にどのようなことを学びたいのか、授業後にどのようなことを学んだのかを具体的に詳しく書くように指示した。授業前と授業後のそれぞれ9名から回答があった。授業前後の回答を比較して一番目立った違いは、記述内容の密度であった。10月に行った「学んでみたいこと」への回答は、ほとんどが箇条書きのものであり、「伝統芸能にはどんなものがあるのか」「着物の歴史が知りたい」「日本の宗教について知りたい」のような具体的記述に乏しいものが多く、日本文化を学ぶことに対して漠然としたイメージしか持っていないようであった。しかし、1月に行った「学んだこと」への回答では、ほとんどの学生が詳細な記述をしていた。以下に「伝統芸能」の回答例を紹介する。

「歌舞伎の化粧が特に面白いと思います。歌舞伎といえば、特別の化粧を思い浮かぶ人が多いはず。隈取の意味が分かったら、役の立場が分かりやすくなり、芝居の内容もわかりやすくなります。顔の筋肉や血管を強調した化粧法で、人物の役割や感情を表現しています。」

さらに、学生の「日本文化」に対する捉え方の変化を見るために、テキストマイニング法によって自由記述データを定量的に分析する。すべての回答を KH Coder ver3.0⁷⁾ を使って分析し、どのような語彙を頻繁に使用する傾向があるのかを把握する。「語彙の出現回数」、「語彙の共起ネットワーク⁸⁾」、「語彙の多次元尺度⁹⁾」の順に示す。

表3 解答に記述された語彙の出現回数(上位20位)

学んでみたいこと(授業前)				学んだこと(授業後)			
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
知る	38	仏教	7	時代	45	有名	13
日本	20	学ぶ	6	日本	38	歴史	13
歴史	18	現代	5	服装	35	神道	12
思う	16	江戸	5	学ぶ	30	キリスト教	11
着物	15	祭り	5	歌舞伎	29	知る	11
美術	9	神社	5	作品	17	能	10
意味	8	茶道	5	思う	15	平安	10
時代	8	着る	5	宗教	15	面白い	10
絵	7	能	5	美術	14	化粧	9
宗教	7	美術館	5	仏教	13	見る	9

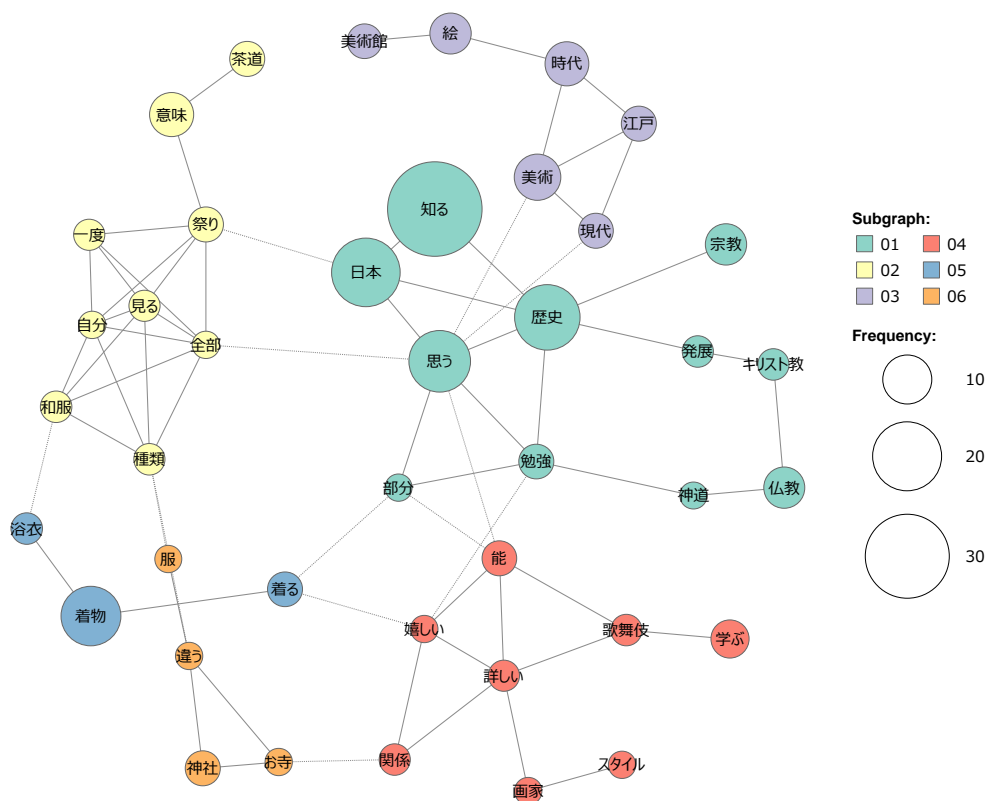


図1 語彙の共起ネットワーク（学んでみたいこと／授業前）

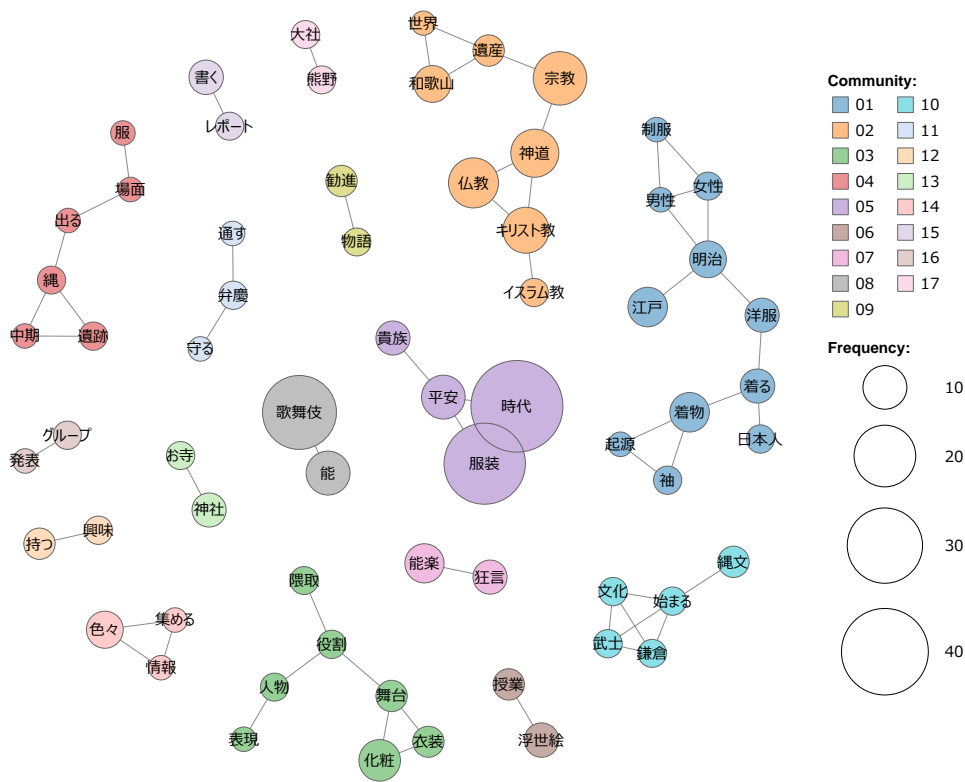


図2 語彙の共起ネットワーク（学んだこと／授業後）

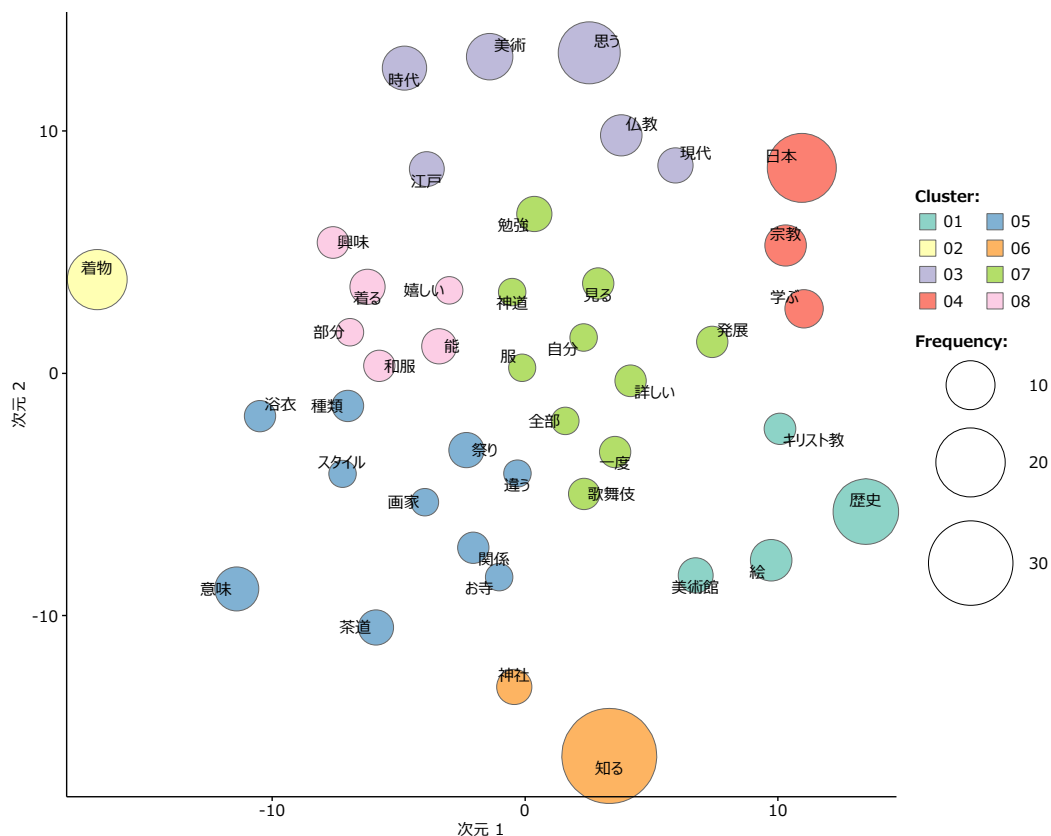


図3 語彙の多次元尺度法 (学んでみたいこと/授業前)

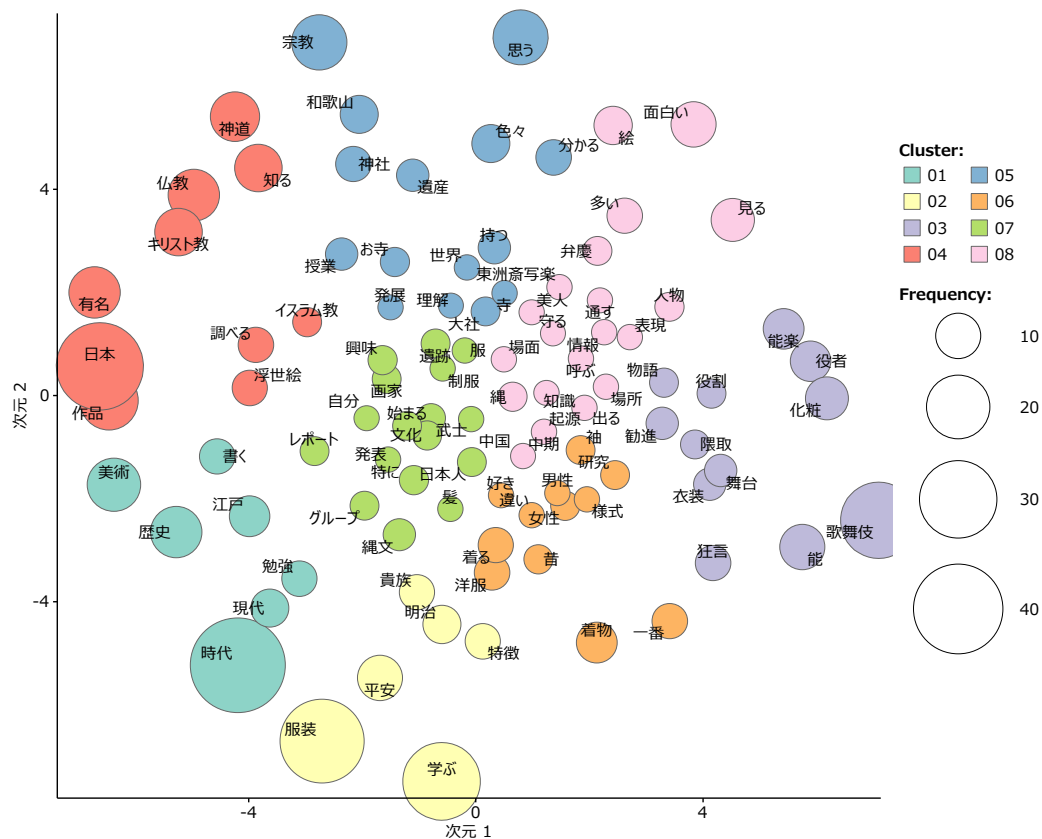


図4 語彙の多次元尺度 (学んだこと/授業後)

語彙の出現回数(表3)を見ると、授業前では、「着る」「学ぶ」などの伝統文化体験を通して「知る」ことを目標として捉えており、授業後では、「見る」「知る」活動を通して「面白い」と感じたことが「学ぶ」につながったと捉えていることがわかる。

次に、共起ネットワークを見てみると、図1では、すべての語彙が線で結ばれており、それぞれの語彙に関連性があると統計的判断がなされている。つまり、テーマについて何を学びたいのか具体的にイメージできていない状態であると言える。一方、図2を見てみると、色分けされたグループの中にはそれぞれ線で結ばれているが、他色のグループとは線で結ばれておらず、統計的に語彙の関連性が明確に判断できている。このことから、授業を通して何を学んだのか、それぞれのテーマごとに具体的に記述できているということになるだろう。

そして、多次元尺度を見てみると、図3の授業前の回答は、語彙数が非常に少なく、語彙レベルの文が多かったこともあり、語彙と語彙の距離が離れている。しかし、図4を見ると、語彙と語彙との距離や重なり具合が外側から中心に向かって渦を巻くように密になっている。また、語彙からどのような活動をしたのかもわかる。例えば、黄緑のグループの中に「自分」「興味」「レポート」「グループ」「発表」、緑の中に「書く」、赤の中に「調べる」といった活動に関する語彙が見えることから、学生はこれらの活動や他者とのやりとりを通して「日本文化を学んだ」と捉えていると考えられる。

8. まとめと今後の展望

本実践の目的は「日本文化について多角的に考えられるような授業を計画し実施すること」および「授業を通して学生の日本文化に対する捉え方がどのように変化したのかを確認し、授業デザインの改善を図ること」であった。

学生の授業態度や成果物から、授業を通して日本文化を自分のこととして捉え、その考えを言語化し、自己表現していることがわかった。そして、グループ活動での異文化コミュニケーションを通してテーマに対する理解を深め、最終プレゼンテーションにおいて日本文化に関する自分の考えを発表するだけでなく、評価活動によって他者との捉え方の違いに気づくことができた。

しかし、課題もいくつかある。筆者が授業目的や活動意図を明確に伝えなかったことにより、目標を意識化できず積極的に授業に参加しなかった者もいる。また、他者との関係性構築や相互理解に関するインターアクションを学生のみならず教師(筆者自身)も十分に行うことができなかった。

今後の展望は、それぞれの活動において「目標の意識化」と「インターアクション」「ふり返し」の要素を取り入れ、授業に関わる全員が異文化コミュニケーションを通して個人の文化的気づきについて考え、自分の考えを表現することを目指したい。

- ¹ ネウストプニーは「リテラシー」を「何かを理解し、その理解を行動のために使いうる」という意味で使用している。
- ² 青木（2005）による定義は「自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し、結果を評価できる能力」である。
- ³ Microsoft Teams、Zoom などの Web 会議システムを活用して、教員と学生がリアルタイムで授業に参加する形態のこと。
- ⁴ Moodle などの e-learning システムを活用して、テキスト、スライド、動画等のコンテンツをオンラインで公開し、学生が自分のペースで閲覧・視聴する形態のこと。
- ⁵ 2008 年にオーストラリアのクイーンズランド大学で始まったイベントで、博士課程の大学院生が3分間で1枚のスライドを用いて、自らの研究について英語で発表する。現在は65ヶ国600校以上の大学で実施されている。
- ⁶ 文化的気付き度。自分の価値観や行動様式が自分の属している集団の文化に規定されていることにどれだけ気付いているかということ。
- ⁷ KH Coder とは、テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアのこと。アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など、さまざまな社会調査データを分析するために制作された。
- ⁸ 共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結び可視化したものである。図1の実線と破線の違いは、グループ分けの結果を見やすくするためのもので、同じグループに含まれる語彙を実線で結び、異なるグループに含まれる語彙は破線で結び表示される。
- ⁹ 多次元尺度は、出現パターンの似通った語彙の組み合わせにはどのようなものがあるのかを見るためのものであり、距離が近いほど類似性の高い語彙が近くに配置される。

[参考文献]

- 青木直子（2005）「自律学習」日本語教育学会（編）『新版日本語教育事典』大修館書店、773-774.
- Bennett, M.J. (1998). *Intercultural Communication: A Current Perspective*. In Bennet. M.J. (ed) *Basic Concepts of Intercultural Communication: Selected Readings*. Yarmouth, ME: Intercultural Press, Inc.
- Hall, E.T. (1976). *Silent Language*. New York: Anchor Books.
- 細川英雄（2012）『「ことばの市民」になる—言語文化教育学の思想と実践』ココ出版.
- J.V.ネウストプニー（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店.
- 国際交流基金（2018）「2018年度 海外日本語教育機関調査」『国際交流基金』<https://www.jpif.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey18.html>（2021.01.15 アクセス）
- 小玉安恵（2018）「オンラインによる異文化間協働型の日本文化の授業 COIL の試み—異文化間で活躍できる人材の育成をめざして—」『日本語教育』169号、日本語教育学会、93-108.

森川結花 (2020)「日本文化体験学習にかかわる教師の認識」『甲南大学教育学習支援センター紀要』第5号, 甲南大学教育教職センター, 37-51.

村松直子 (2017)「高等専門学校における異文化理解教育—「ミニ研究」のデザインと授業実践についての考察—」『沼津工業高等専門学校研究報告』第51号, 沼津工業高等専門学校, 79-84.

西谷まり (2019)「日本語・日本文化研修留学生クラスにおける新たな試み:一橋大学及び地域を探索する」『一橋大学国際教育交流センター紀要』第1号, 一橋大学国際教育交流センター, 93-102.

高嵯幸子・都恩珍 (2016)「海外の日本語学習者に日本文化をどう教えるか:アクティブラーニングを取り入れた授業の試み」『桜花学園大学学芸学部研究紀要』第8号, 桜花学園大学学芸学部, 115-127.

徳井厚子 (1997)「文化モデルと日本事情教育」『信州大学教育システム研究開発センター紀要』第2号, 信州大学教育システム研究開発センター, 191-207.

[参考 WEB サイト]

「Google Arts & Culture」Google LLC, <https://artsandculture.google.com/?hl=ja> (2021.01.15 アクセス)

「ひろがる もっといろいろな日本語」国際交流基金, <https://hirogaru-nihongo.jp/shodo/> (2021.01.15 アクセス)

「おはなしのくにクラシック」NHK for School, <https://www.nhk.or.jp/school/kokugo/classic/> (2021.01.15 アクセス)

「Three Minute Thesis」The University of Queensland, <https://threeminutethesis.uq.edu.au/> (2021.01.15 アクセス)